

イスラーム・ジェンダー学科研 講演会

講師：清末愛砂先生（室蘭工業大学大学院教授）

アフガン女性運動と蓄積される教育支援の経験-RAWA を例にして

日時：2022 年 11 月 20 日（土）15:00-17:00

場所：オンライン

司会：山崎和美（横浜市立大学）

コーディネーター：森田豊子（鹿児島大学）

報告内容：

1977 年創設の RAWA（アフガニスタン女性革命協会）は、2001 年の対アフガニスタン攻撃を批判し「ターリバーン政権はアフガン民衆により倒される」と主張した。しかし、そうした声を無視し、米国は同攻撃を「アフガン女性の人権と尊厳を守る」もの等と正当化した。IG 科研メンバーの鳥山純子氏、嶺崎寛子氏が翻訳したライラ・アブールゴド『ムスリム女性に救援は必要か』（2018、書肆心水）でも紹介されているが、RAWA はアフガニスタン内部の女性たちが設立し、一時はパキスタンなどに拠点を移しながらも、これまでアフガニスタンで学校・児童養護施設・識字教室の運営などの教育支援活動に力を入れてきた団体である。清末氏は 2012 年から仲間と共に RAWA との連帯を続けてきた。

RAWA は「女性の力で社会を変革し、女性の権利を含みすべての人々の権利と自由が保障される民主的な社会を築くこと」を目的とし、アフガニスタン国内での教育支援活動の他、外国勢力や軍閥・イスラーム主義諸勢力を含む、女性の人権を侵害するあらゆる「勢力」を問題化し、女性に対する人権侵害を冊子、動画や静止画などを用いて国際社会へアピールしている。彼女たちは教育支援を続けることで読み書き能力を得るだけでなく、女性が社会を変革する主体となるための意識を醸成し、社会変革のための次世代を育てる手段として考えているという。昨年 8 月 15 日以降のターリバーンの再支配後も、一部を除いてメンバーたちは今もアフガニスタンで活動を続け、地下学校などで女子への教育を続けている。

これまで10年間にわたり RAWA との連帯活動を続けた結果として、清末氏は、アフガニスタンの家父長制問題と外部からの占領者の支配の双方を批判してきた RAWA が、アフガニスタンを特殊なものとしてだけ語ることをせずに、自らの揺らがない軸にある人権意識として、ある種の「普遍主義」をあえて打ち出してきたことに着目し、我々もその点を学ぶべきではないかと最後に指摘された。

